熱

火渡えりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
熱

【Ｎコード】
Ｎ５９５４Ｕ

【作者名】
火渡えりな

【あらすじ】
さよなら絶望先生（命×望）で、ほのぼの激甘。
風邪を引いてしまった絶望先生のお話です。

もう何年も何十年も前の事――・・・・。
高熱を出し、余りの辛さに涙を流す私の頭を撫でてくれた優しい手が忘れられない。

この日、珍しく望は起きるのが遅かった。
元々、寝起きはそこまで良い訳ではないが、悪くも無い。
ただ、全身からする倦怠感に起き上がるのが辛かったのだ。
もしかすると風邪を引いてしまったのかもしれない。
幼い頃から病弱で風邪を引いては、高熱を出して寝込んだ事など度々あった。
それこそ、大人になってからは風邪を引く回数も、熱を出す事も減りつつあるが・・・。
だとしても、最近は特に気温が低く、雪が降る日もあった。
極一般的に健康的な人でさえ、この寒い日が続けば誰だって風邪を引いても
可笑しくは無いだろう。
しかし、だからと言い、仕事を休む訳も行かず、望は学校へ行く支度を始めた。

「（怠い・・・・頭痛い・・・膝が笑ってる・・・）」
学校へ行き、職員室にある自分の席に着いたもの、
余りの倦怠感と頭痛に授業の準備所か、何も出来ないでいた。

心成しか、寒気と膝ががくがくと震えている気がする。
もしかすると、本当に熱が出ているのかもしれない・・・・そう、思ったが、
それでも、それを実感してしまうと、更に自分が辛くなるだけなので、
敢えて、熱を測りに保健室へ足を運ぶ事だけはしなかった。

「（もう、こんな時間ですか・・・・）」
フッと、職員室の時計を見ると、丁度ＨＲが始まる時間を刺していた。
取り合えず、教室へ向かうべく望は自分の席から立ち上がった。

教室へ入り、すぐにＨＲが始まった。
クラスの出席名簿を開き、全員いるかを確認する。
「大草さん・・・加賀さん・・・・木津さん・・・・・小節さん・・・・・・・全員居ますね」
名簿にチェックの印を書くにもその細かな動きにでさえ、右腕の間接に痛みが走る。
心成しか、目が霞んで見える。

「・・・それでは、授業を・・・・」
そう言いかけた途端、ズキンッとした酷い頭痛が望を襲い、
同時に天と地が引っ繰り返った様な感覚に襲われる。

バサッと、音を立てて望の手から出席名簿が床へ落ちる。

「「先生っ！！？」」
生徒達の驚く声が聞こえたと思ったら、望はそのまま意識を手放し、倒れこんでしまった。

「きゃぁっ！先生っ！！」
「先生ッ！？」
突然の出来事に混乱し悲鳴を上げる生徒達の声も、心配し駆け寄る生徒の声も、
意識を手放した望には最早届いていない。

□■□■

望は夢を見ていた。
もう、何年も・・・・何十年も昔の夢を――・・・・・。

「望！熱があるじゃないか！如何して黙っているんだ！？」
高熱を出し苦しさの余りに部屋の隅で涙を流していた所を、
兄である命に見つかり怒られた。

「だってっ・・・・・・父様も母様も忙しいから・・・心配掛けちゃ駄目だって・・・・」
「それはそうだけど・・・・」
熱の苦しさと、命に怒られた事でより一層涙を零しながらそう言う望に、
命は困った顔で幼い弟を見つめる。

この弟は何時もそうだった。
まだ幼い子供なのに、何時も自分の事よりも人の事を気にかけ、
自分は無理をしようとする。
それは、多忙な両親よりも、自分達より更に年上の二人の兄達より

も、
日頃から望の傍に居て、面倒を見てきた自分が良く知っている。
「良いかい？望」
優しく望の頭を撫でてやり、声を掛ける。
その瞬間、又怒られると思ったのか、ビクッと、望の体が震えた。
「今の病気が悪化して、もっと重い病気に掛かったら、望がもっと辛くなるんだよ？
望だけじゃない、父さんも母さんも辛いし、僕だって辛いんだよ」
「・・・・？・・・・みこと兄様も？」
伏せていた顔を上げ、そう尋ねる望に「そうだよ」と変事を返す。
「だからね、望。もしも具合が悪くなったり、辛くなったら、ちゃんと言うんだよ。
もしも、父さんや母さんに言い難いなら、僕の所へおいで」
「誰も望の事を怒ったりなんかしないから」
そう言い、優しく望の頭を撫でる。

そう、何時もそうだった。
高熱で辛い時も、風邪を引いて辛い時も、何時も命が傍に居て頭を撫でてくれた。
自分と二つしか年齢が違わないのに、命の手は大きくて暖かくて、何時も優しく自分を包んでくれた。

その優しい手が今でも忘れられない――・・・・・。

□■□■

「・・・・」
フッと、望は目を醒ました。
まだズキズキと痛む頭を押さえながら、視界がハッキリするのを待つ。
徐々に視界がハッキリして行くと、ベッドの横にある点滴が視界に入り、
此処が病院である事を理解する。

「よう、目が覚めたか？」
「みこ・・・と、にい・・・さん・・・？」
不意に掛けられた声にそちらを向くと、白衣を着た命の姿が。
それにより、此処は兄の病院である事に気付く。
しかし、何故自分が兄の病院に居るのかが理解できず、独り言の様に口を開く。

「あれ・・・私・・・・？」
「学校で倒れたんだ。お前の生徒さんが連絡をくれたから此処に搬送して貰った」
「たお、れ・・・・？・・・・私、倒れ・・・」
命から情況を説明され、ハッと気付いた。
そうだ、自分が倒れた事により、又命に迷惑を掛けてしまう。

「ご、ごめんなさいっ！もう大丈夫ですから・・・ッ！」
ガバッ、と、勢い良く起き上がり大慌てでそう言う。
しかし、命は「良いから心配するな」と告げた。

「午後と明日は休診にしたから心配するな」
「そんなっ！私なんかの為に休診なんて・・・・私の所為で命兄さんに迷惑が・・・・」
命の言葉に戸惑い焦りながらそういう。
嗚呼、自分は如何して人に迷惑しか掛けられないのだろう・・・・。
兎に角、これ以上命に迷惑を掛けたくなかった。

「私はもう大丈夫ですから・・っ・・・だから、兄さんは診察に戻ってください・・・っ・・」
途切れ途切れに苦しそうに咳をしながらそういう望に命は溜息を付く。
この弟は何年経っても、大人になっても変わらないのだと・・・・。

「望、いい加減にしないさい」
決して大きくは無かったが、望を静止させるには十分な低く怒りの感情が籠った声。
ビクッと、体を揺らし、言葉を止めた望に命は優しく彼の頭に自分の手を乗せる。

「何故何時もお前は誰にも何も言わず、自分だけで抱え込もうとするんだ」
「だって・・・・」
「だって・・・じゃない。言っただろう、お前が更に思い病気になったら、
お前も更に辛いし、私達にだって更に迷惑が掛かるんだぞ」
「・・・・・」
命の言葉に昔、兄に言われた言葉を思い出す。

『病気が悪化してもっと重い病気に掛かったら、望がもっと辛くな

るんだよ？
望だけじゃない、父さんも母さんも辛いし、僕だって辛いんだよ』

先程見た夢にも出てきた・・・。幼い頃、命に言われた言葉。
無意識のうちに涙が溢れ、頬を滑り落ちる。

「わ、私・・・・。兄さんに心配掛けたくないと思って・・・・なのに、私・・・・・・。
兄さんだって・・・兄さんです・・・っ！・・・・私なんか放って置いて良いのに・・・
なんで私なんかを構うんですか？私なんか迷惑を掛けるだけなのに・・・・」

解っていた――・・・・。
迷惑を掛けたくないと思ってやっている事が更に迷惑に繋がる事も・・・・。
「迷惑を掛けたくない」というのは唯の口実であり、
本当は単なる自分の我侭である事も・・・・。
止めたくても止められない・・・・。

「何で私なんかを大事にするんですか・・・・」

呆れられて捨てられるのが唯怖いだけ。
だから、何時も自分の我侭を通してきた。
「迷惑を掛けたくない」そんな言い訳を言いつつ・・・・。

「・・・・望」

名前を呼ばれ、再び肩を揺らす。
きっと、又怒られる・・・そう思った。

「何で大事にするかなんて、何でそんな事言うんだ？」
「・・・・」
「そんなの、考えなくたって解るだろ。・・・・お前が何よりも大切だからだよ」
優しく望を自分の方へ引き寄せ彼の額に軽く口付ける。

「この病院の事も患者の事も大切だが、私が一番の優先にしていて、私にとって一番大切なのは・・・、望、お前なんだよ」
「命兄さん・・・・」

「私にとってお前は、掛け替えの無い存在だから、だから大事にして当然だろ？」
耳元でそう囁かれ、望はその瞳を閉じた。
嗚呼、やはり、この兄には敵わない。

「兎に角、これ以上迷惑を掛けたくないと本気で思うなら、今は大人しく寝なさい。
点滴が終わったら私の家に連れて帰るから、お前は私の家で療養する事」
「・・・・あの、命兄さん・・・」
命の言葉に望はおずおずと口を開く。

「頭が痛いです・・・・体中が痛いです・・・」
「うん、それで・・・？」
「あと、喉も痛いです・・・それと・・・」

「うん」
「あの・・・明日も休みなら、一緒に居てください」
ぎゅっ、と、命の白衣の袖を掴む。
そんな望の姿に命は薄く笑みを浮かべた。
「嗚呼、お前が泣いて嫌だと言っても、そうするつもりだから安心しなさい」
そう告げて、再び望の額に軽く口付けた。

「さて・・・、兎に角今は眠りなさい。お前が又起きる頃には点滴も終わっている筈だ」
そう言い、望をベッドに横たわらせ布団を掛けてやる。
そして、暫くすると、日頃の疲れと熱が有る所為か望の意識は再び闇に包まれた。

静かな寝息を立てて眠る望の髪を優しく撫でてやる。
何時までたっても、この世話の焼ける弟には困ったものだが、
それでも見放せないでいる自分がいる。
我ながら、自分も甘やかし過ぎだとは自覚している。
しかし、それでも、自分もそれを止める事は出来ない。

「確かに私はお前が大切であるが・・・・。
それよりも、お前がいなければ私は生きていけないんだよ・・・望」
そう、独り言の様に眠っている望に言うと、彼の唇に優しく口付けた。

＜終＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5954u/

熱

2011年7月5日17時42分発行